

[成果情報名]ビワ「なつたより」の着房率向上のための7月誘引

[要約]ビワ「なつたより」では7月中に枝の誘引処理を行うことにより、着房率を向上させることができる。

[キーワード]ビワ、「なつたより」、誘引、着房率向上

[担当]長崎県農林技術開発センター・果樹研究部門・ビワ落葉果樹研究室

[連絡先] (代表) 0957-55-8740

[区分]果樹

[分類]普及

[作成年度]2014 年度

[背景・ねらい]

ビワ「なつたより」は、樹勢が強く枝伸長も旺盛であるため着房率が従来のビワ「茂木」に比べ低く、栽培に取り組む生産者及び技術者から若齢期の結果枝管理法について対策が求められている。そこで、収穫後に行う枝の誘引作業の処理時期と冬期の着房状況について検討を行う。

[成果の内容・特徴]

1. 樹全体の着房率は誘引無処理区や9月および8月誘引区に比べ、7月誘引区で高い傾向を示した(表1、2、図1)。
2. 中心枝、果痕枝、副梢の結果枝別の着房率は、7月の誘引区で高かった(表1、2、図1)。
3. 2014年度(2015年1月20日)の着房率は誘引無処理区と8月上旬および8月下旬誘引区との間に有意な差は認められなかった(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. ビワ「なつたより」栽培圃場の生産安定技術として活用できる。
2. 2014年度は夏期の多雨寡日照により県内産地のビワの着房率は過去10年間で最低であった(露地着房率「茂木」44%)。
3. 調査樹は収穫後に発生する新梢の芽カキを実施する際、果痕枝の場合2新梢を残し、中心枝の場合、副梢を2新梢残す新梢管理とした。
4. 枝の誘引は収穫後に発生する新梢が展葉硬化してから実施する。
5. 苗木定植当年から定植翌年夏期までは、支柱に枝を結束し枝の伸長を促す。枝の誘引は、定植翌年夏期に分岐部の損傷(枝裂け)が発生しないように丁寧に行う。
6. 誘引後の枝中央部はやや上向き、枝先端部は中央部よりもやや立ち気味となるように実施する。なお、枝先が水平以下とならないように注意する。
7. 調査樹は場内植栽の6年生「なつたより」(2010年10月に1年生苗定植)および10年生「なつたより」(2006年3月に1年生苗を定植)を6樹から10樹を用いた。
8. 着房率向上や果実品質向上のためには、ビワ園外周の環境整備を整え、樹体に十分な日照が当たるようにすることが重要である。
9. ビワ「なつたより」の枝は旺盛に伸長するが、分岐部などが裂け易いため、誘引の際には枝が裂けないように分岐部を固定し、枝の引き下げを行うなど、誘引の工夫が必要である。

[具体的データ]

表1 ビワ「なつたより」の誘引時期と着房率 (2012)

誘引時期 ^z	結果枝別の着房率 ^x (%)		
	中心枝	副梢	全枝
7月下旬	72.8 a ^y	43.6 a	56.0 a
9月上旬	55.3 b	42.0 a	48.0 ab
無処理	53.0 b	33.1 a	40.3 b

^z 7月下旬;7/27、9月上旬;9/7に実施

^y 縦の異なる文字間にはTukey多重検定により5%レベルで有意差有り

^x 11/9に調査実施

表2 ビワ「なつたより」の誘引時期と着房率 (2013)

誘引時期 ^z	結果枝別の着房率 ^x (%)			
	中心枝	副梢	果痕枝	全枝
7月上旬	100.0 a ^y	95.0 a	62.5 a	82.1 a
7月下旬	100.0 a	100.0 a	53.8 a	78.2 a
8月中旬	100.0 a	66.7 b	50.0 a	68.4 a
無処理	88.2 b	38.8 c	15.0 b	48.8 b

^z 7月上旬;7/5、7月下旬;7/23、8月中旬;8/13に実施

^y 縦の異なる文字間にはTukey多重検定により5%レベルで有意差有り

^x 10/23に調査実施

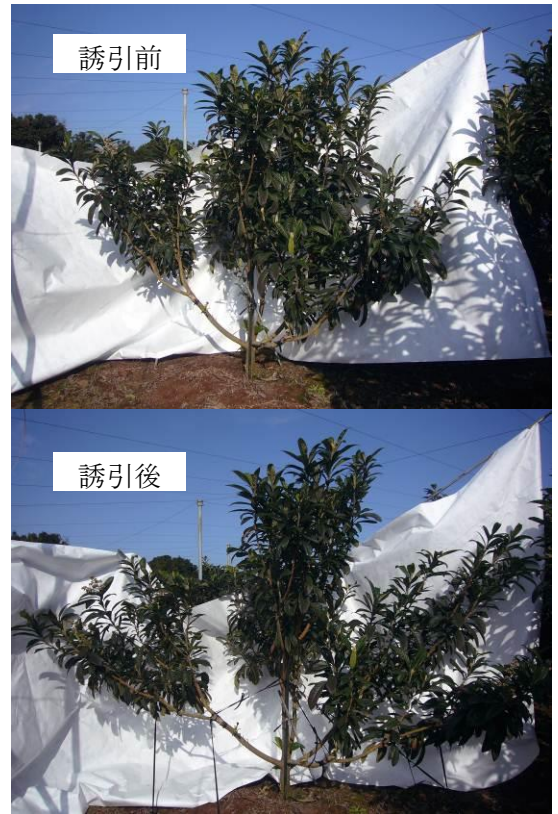


写真1 誘引実施前と誘引後の樹姿

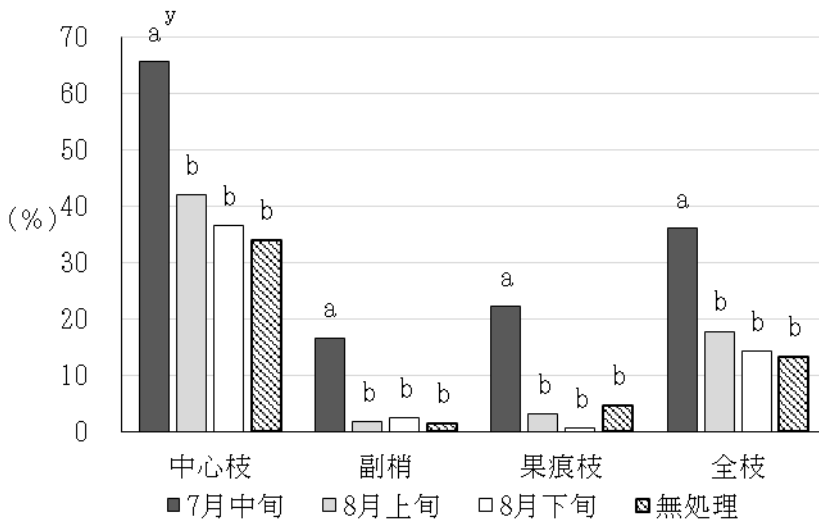


図1 誘引時期^zの違いとビワ「なつたより」の結果枝別着房率^x (2014年)

^z 7月中旬;7/16-18、8月上旬;8/7-9、8月下旬;8/25-28に実施

^y 処理群内の異なる文字間にはTukey多重検定により5%レベルで有意差有り

^x H27/1/20に着花調査実施

[その他]

- 研究課題名 : ビワ新品種「なつたより」若齢樹の安定生産技術の確立
ビワ「なつたより」の高品質果実安定生産技術と成熟予測システムの開発
- 予算区分 : 県単
- 研究期間 : 2011~2013年度
- 研究担当者 : 松浦正